未来のはなし

満月の次に上り、新月へと向かう始まりの月を既望（きぼう）と言うそうだ。
きぼう。　読みは同じなのにね……

あの日、僕の希望は月の陰りと共に消えてしまった。
〝すべての人間が彼女たちみたいな善い人になってほしい〟
〝すべての人が、その人の才能を開花させて幸せになってほしい〟
それだけだった。
ただそれだけだったのに、みんなは僕たちを拒絶した……
僕の願いは何も間違ってなかったはずなのに……
中立神様の元で、みんな幸せになれるはずだったのに……

あれから幾度とあの日を夢に見て、みんなは何度でも僕の願いを否定した。
僕は眠るのが怖くなって夜を徘徊するようになった。
『部屋に居ても息が詰まるから』

そう自分に嘯（うそぶ）いて中立神様を待つ時間だけが、今や僕の心安らげる唯一の場所。

僕はまだ学生で、学生は学校に通うものだから今も通学してはいるけど、あの場所に僕の居場所は無い。授業が終わると僕は牢屋から逃げるように学校を出て、人気のない場所へと足を向ける。

清められた場所というものは往々にして人々から隔絶された場所にあるもので、こうしてもっと霊場で力を磨けば中立神様も振り向いてくれるかもしれない…………そうとでも思っていないとやりきれない…………　道中ここから見下ろす景色は、僕たちの不完全な世界を象徴するように薄暗く淀み、見るものの心を沈ませる。いっそ海の底にでも沈んでしまえれば少しは気も晴れるだろうか……？　海月（クラゲ）みたいに当て所なく波に攫われて、誰も僕を知らないところへ行きたい……

僕は一体何だったんだろう……　夢叶ったと浮かれて、僕を認めてくれる誰かにやっとめぐり逢えたなんてぬか喜びして……本当に滑稽だ……

「姫に会いたい……」

合わせる顔がない。

「中立神様……」

答えてよ……　僕を見てよ……
裏切られるくらいなら初めから……っ！
こんな、悪戯に期待させるようなことしないでよ……！

中立神の巫女としての役目を終えて神樹の世界から帰還し、幾数カ月。
９月の天馬美咲は未だ立ち直れてはいなかった。

「どうして僕の記憶を残したりしたんだ……！」
力を取り上げて辛い記憶だけはそのまま残して、こんなの苦しいだけじゃないか……！
僕が何か怒らせるようなことをしたなら改めるからっ！　お願いだから帰ってきてよ、中立神様！　僕には中立神様しかいないのに……捨てないでよ……『まあもうエエやないのワレ様が居るやろ？』
僕はもう、どうすればいいのか分からないよ……『きもちぃことして、そんな力捨てよ？　神様がなんぼのもんじゃい！』……気持ち悪い悪霊に憑りつかれるし……『な？ちょっとだけ、な？　先っちょだけ。エエやろ？』

……僕が悩んでるのを面白がって隙あらばこうして…………………

「……いい加減にしてくれないか」
「もろちん、エエ感じにしたるで……」
死ｎ…………こいつのペースに乗せられちゃ駄目だ……いつもの挑発だ……
僕は神聖な巫女なんだ……惑わされちゃだめだ……
「で？　やることは、ウジウジとそのお姫ちゃんの学区うろつくだけか？　スパっと会いに行きゃエエやん、鬱陶し」
うるさい……
「カミさんの気分でいつ天地がひっくり返ってもおかしくない短い人生、有意義に過ごさないかんよ？」
「うるさい！」
「おーおー、すまんすまん。正論でブッ叩いてしもて、ちゃんと反論できる隙のあること言ってあげんと可哀そうやったなあ」

「何が正論だ！　僕を貶めることしか考えてないくせに！」
「ふひっ、その表情最高に可愛い～♡」いやだいやだいやだ!!　気持ち悪い！助けて中立神様!!　姫！　誰でもいいから僕をたすけて！
「可哀そになあ、だーれも美咲ちゃんの事なんか気にしてくれんなあ？　お姫ちゃんも自分から会いに来てくれてもええはずやのに、やっぱ人生かけた一世一代のカチコミさえ失敗する無能じゃあのう？　その他大勢に埋もれるゴミカスちゃんなんて居ても居らんでも一緒やし、どうでもよくなったんやろなあ」
「ちがう！姫はそんな子じゃない！」
「そかなあ？　そうかもなあ。でも根暗なジブンに気ィ利かせて、テキトーにノリ合わせてくれとっただけかもしれんけど、そんなの考えたないよなあ」
「もうやめてくれ……！　僕はそんなこと思ってない！姫のことまで侮辱しないで……！」
「耳塞いでしゃがみこんで、なあそれ、お友達想っての言葉なん？　ジブンのキレーな幻想を守る為に言っとるだけちゃうんの？　特別な絆があると思ってた相手が、あっさりジブンのこと捨ててしまうなんて認めたくないだけちゃうん？　なあ、どーなん？　なあ？」
ききたくない！　もうたくさんだ！　きえろ！　きえろ！　きえろ！　きえろっ!!

「あー、ええよ、ええよ。　根暗で無様な美咲ちゃんが自己批判に耐えかねて分離顕現したようなワレを拒絶したところで現実には一ミリも干渉せんから」

消えてよ……！　ぼくの妄想だっていうなら消えてよぉ……!!

「死んでも逃げられへんで？　後悔とトラウマに囚われて、永遠に彷徨い続けるんや。ワレだけは絶対美咲ちゃんとのこと見捨てんけえ、安心し？　な？」

神に与えられた己の性を運命を受け入れろと悪魔が囁く。

美咲の魂を穢す掌が服の裾から潜り込み、肩や腹部で愛撫（あいぶ）を始める。

今すぐ全てのしがらみを踏み倒して逃げだしたいのに、折れた心を覚られるのも怖くて動けない……立てない……僕はこのまま一生を終えるのか？　いやだ……たすけて……誰でもいいから……こいつから逃げられるなら、なんでもするから……だれか「ワレ様がず〜っと一緒に居たる……さわさわさわ……」

「**あ**」

悪魔と目が合うと僕はもう耐えられなくて、絞め殺される鶏のような悲鳴をあげて泣き出してしまった。産まれたばかりの赤ん坊の様に、血と涙で顔をぐちゃぐちゃにして救いを求めた。限界だった。

その結果、悪魔にすべてを奪われるとしても、このまま逃げられないなら一緒だと思った。世界のすべてが僕を絶望させようと振る舞っているように思えた。　服の中へ侵入した夥しい数の生殖器の塊のような姿の悪魔が、背後から全身を陰茎で舐め上げて、身を固く震わせながらその穢身（えしん）を僕の背中に肌に直接擦り付ける。

「……美咲ちゃんはこの先もずーっと何にも成れんで、なーんも上手くいかん。才能なんて生まれ持った可愛い顔とスケベな身体だけのゴミクズやもん、しゃあないやん。歳食ったらそれも無くなる儚いもんや。今のうちに目いっぱい愉しむのが美咲ちゃんのためなんや……こんな厳しいこと言うんも全部美咲ちゃんのためなんや……ごめんな」

　胸を裂かれてがらんどうになった心臓に、どろどろと気持ちの悪いものが流れ込むのを感じる。逃げなきゃいけないのに、気持ち悪いのに、心は憔悴しきり、身は竦み、身体は言うことを聞かない。

「全部、ワレに任せてくりゃあいい。　美咲ちゃんは一生快楽だけを感じて幸せに死ぬんや。不安も孤独も絶望も、もう美咲ちゃんには近寄らせん。　我だけのモノにしたる。だから、もう何も考えなくていい。力を抜いてすべてを忘れて身を委ねなさい」

　悪魔が僕の胎内に這入ろうとしている。

堕落への誘いが救いのようにも聞こえた。　「んうっ?!」誰にも言葉が届かぬように喉を塞がれ、言葉を穢された。腹は悍(おぞ)ましい体温で満たされ、穢れた僕の口からは、常人には視えない悪魔の種が零れる。魔手から逃れようと藻掻くも、それは初めから存在しないかのように、こちらからはすり抜けて悪魔に触れることさえ叶わない。「んっ……」「っ………ぁ……………………

…………顔を濡らしていた体液が乾いてべたべたする。

もうお終いだ。僕の中で僕の夢を喰らって、すべてを悪魔のせいにして不平と憎悪を吐き喚くだけの醜いバケモノが育っていく。心が魂が異臭を放ちながら溶けていく。

「ゃ……だ」

……こんなのはいやだ。

……死のう。そんなものに成るくらいなら人のまま死にたい……

どうせこいつが居る限り僕に未来は無いんだ。生きていても仕方がない。　死のう。

「どうしたの？」

妄想と喧嘩して奇声を上げる異常者(ぼく)なんかに声をかけてくる人もいるんだね……

でも、僕なんかと関わらない方がいいに決まってるから無視をした。　なのに――

「え……？　めぶ…き…？」
「どこか痛むの？　自分の名前は言える？」
「どうしてこの時代に……？」
芽吹が僕を見てる。こんな汚い僕に手を触れて、僕の身を案じている。
首筋に添えられた芽吹の手がひんやりして気持ちがいい……繋がれた手が柔らかくて安心する……　優しく肩を抱かれ、背中をさすられ、手を振られ、もう大丈夫だと声をかけて、心を尽くしてくれる……
「……怪我は無いようだけど、いい状態ではないわね。歩ける？」
……脚に力が入らない。
「大丈夫よ」
僕はどんな顔をしていたんだろう…あの芽吹があんなに優しく微笑んで……僕は滲む涙を隠すのに精いっぱいで、あろうことか抱きかかえられて木陰まで運ばせてしまった……
「飲み物買ってくるから」
呆気にとられたまま状況に流される……　下刈りされた草の上に芽吹が大風呂敷を広げて、いつの間にか僕はそこに寝かされていた。横になると小さな虫たちが、黄味(きみ)を帯びて

乾く草の上を歩いていて目が吸い寄せられる。
嫌悪感は感じない。　風になびく木ノ葉のさえずりが心地いい……
僕たちのことなんて気にも留めずに彼らはただ生きている。　それは僕の存在を無視しているわけでも遠巻きに避けているわけでもなくて、僕がここに居るということを肯定も否定もせずただ……
「仮に僕が特別な存在になっても、この子たちは一瞥もくれないんだろうね……」
イネの青い香りと、地面から暖気と共に立ち昇る水の気配。
花の蜜を吸っていたミツバチが空高く飛んで往く。
「みんな何処へ行くのかな……　蜜を探しにかな……それとも巣に帰るところかな……」
僕は飛翔する小さな命たちを視線で追いかける。　小さな命はその果てに、目に痛いほど鮮烈で膨大な空色に溶けてしまい、そこから先を知ることはない。あの空色の果てには中立神様もいるはずで、見ているはずなのに、もう二度と僕を見つめてはくださらない。
本当はとっくに分かっていた。
僕は見捨てられてしまった。
巫女の肩書が無ければ誰も僕の言葉を信じてくれないのに、大赦の巫女が知らないこと

を言うと嘘だと決めつけられてしまう。僕は本当のことしか言っていないのに、良くて嘘吐き呼ばわり、悪ければ異常者か異端者として排斥される。
　僕を認めてくれない世界で生きることはあまりに苦しくて、中立神様に見出されて初めて僕の存在を肯定してもらえた気がした。嬉しかった。すべてを捧げて尽くそうと思った。僕はただ一柱の理解者に縋った。僕の存在を認めてくださる中立神様こそが、僕が存在すべきただ一つの世界だったから。今だって中立神様への感謝を忘れたことはない。
　……それなのに僕は献身を忘れ、いつの間にか立場に甘んじるようになり、その理解者を僕の心を満たすための都合のいい存在にしていた。自覚が無くても結果がそれを示してる。……捨てられて当然だ。
「……だから、ほんとうは、全部、ぼくが悪いんだっ……！
　ごめんなさい、中立神様……っ！　それでも僕は、巫女でなきゃっ……！……」
　生きてはいられない。
　誰にでもなく絞り出された独白が虚空に吸い込まれ消える。
　雲一つない空が何処までも遠く青いから、僕はまるで地面という崖にしがみつく哀れな遭難者のように、突然命綱（重力の鎖）が切れてしまうんじゃないかと不安になって目を背けた。

視線の先には、３本のスポーツドリンクを持って駆けよる芽吹の姿が映る。
(芽吹がどうしてこの時代に居るのかは分からない。　でも……芽吹なら……)
覚えているだろうか。
「ふうっ、ごめんなさい、自販機が中々見つからなくて……！」
芽吹からスポーツドリンクを受け取って口に含むと、あっという間に身体に吸収されてしまって、ごくりごくりと雫を強く喉奥へ押し込むように飲み干した。
「どう？　少しはマシになったかしら？」
「ん……ありがとう、芽吹。まさか君にまた逢えるなんて思わなかったよ……そうだ、どうしてこの時代に？」
芽吹が不思議な顔をして覗き込んでくる。
「えっと……前にも何処かで会ったかしら……？
ごめんなさい、覚えていなくて……改めて自己紹介でもいい？」
……やっぱり記憶は。
「……いいよ、そんな気はしていたから。
僕の名前は、天馬美咲(てんまみさき)。……美咲と呼んでくれると嬉しい」

「私は三枝糸葉（さえぐさいとは）。よろしくね、美咲。　……どうかした？」
……それは……そうか。芽吹なはずないよね……何を考えているんだ、僕は……
「ごめんなさい……人違いでした。友達にとても良く似た子がいて……すみません」
「フフッ、そうなんだ。気にしないで。　熱中症で立つこともままならなかったんだもの、回復してきた証拠よ」
「熱中症……？」
「少しお喋りしない？　美咲はどうしてあんなところに？　地元の子？」
「僕は……」
どうしてこんなところに居るんだろう……　こんなところに来たって姫に会えるわけでもないのに……何のために……知らない人に迷惑までかけて……
「私はこの辺りに謎の神社？があるって聞いて来たんだけど、美咲は知ってる？　なんでもその神社は大赦に統合されずに西暦の頃の姿のまま存在し続けているとか、いないとかで、そんなのあり得ないと思うんだけど、だとしても噂の発端になった何かは在るのかもしれないし、統合前に廃神社になったのだとしてもそれが数百年管理されないまま保（も）つとは考えられないし、あるとしたら個人がひっそりと匿うように代々氏神を祀っているとか

だけど流石に私有地に立ち入るわけにもいかないし公民館や図書館や通りすがりの人に聞き取りもしたけど誰も知らないみたいなのよね。でも私は自然発生的な噂の振る舞いからそこに何かがあるって確信が……ごめんね、人と雑談するのなんて久しぶりで、つい舞い上がっちゃって。　恥ずかしいなぁ、もう……」

　照れくさそうにはにかむ彼女に釣られて自然と頬が緩む。

　こんな気持ちも久しぶりだ……

「……ううん。すごい熱量だね……好きなのかい？」

「特に好きってことではないけど、知りたいことがあって調べてるの」

「そうなんだ。　けれどごめん。僕もここの人間ではないし、そんな場所があるなんて聞いたこともないな。　……三枝さんは誰からそんな話を？」

「誰というか、噂だけが一人歩きしていて大本が掴めないみたいな……そんな感じで気になるのよね」

「大赦が放置しているのなら、誰かの勘違いに尾ひれが生えただけじゃないかな？」

　神樹様以外への信仰を塗り潰してここまできた大赦が黙っているはずはない。天の神と同等の神格を持つ中立神様さえ闇に葬られたんだ。そこは徹底しているはず。

「そうね。一方的に語っちゃったけど美咲はどうしてここに？」
「僕は……そうだね。僕は大赦の巫女に……」
見限られた僕は、もう中立神様に仕えることができない。だからといって、あの人達に迎合した嘘を吐いて大赦の巫女になることもできない。進むことも戻ることもできないから、もはや僕には蹲るか斃れていることしかできなくなった。　僕の未来は月明りさえ失った闇の中。
「へぇ……神様の声を聞いたり神楽を舞ったりするの？」
「僕は成れなかったけど……そうだね……」
いっそ記憶を失って初めから何も無かったことにできていたら、今の僕とは全く違う人生が待っていたのかな……？　巫女の成り損ないの僕に未来なんて見えないけどね……
「そうだ。来月末、剣山へ調査に行くんだけど、美咲は予定空いてる？」
「……予定は特にないけど、それは僕も行くのかい？」
「美咲の力を借りたいの。　だめ？」
あんな別れ方をしたからかな……三枝さんは容姿もそうだけど、どうしても芽吹に姿を重ねてしまう……　芽吹本人よりずっと表情も言葉も柔和で、固さなんてまるで感じない

のに……
「僕に力なんて無いよ……　運動も得意じゃないし、足手纏いになる……」
三枝さんの大きな瞳の中で、頼りなくて情けない萎れたモヤシのような僕が俯いている。
「いいえ。あなたじゃなきゃダメなの。
きっと。どうしても……　お願い、人助けだと思って……ね？」
その言葉は、今の僕にはとても抗いがたい。
苦しいほど甘く、二度と向けられることはないと思っていた言葉。逆らえるわけがない。　それが例え、人当たりがいいだけの悲惨な嘘だったとしても。
「そこまで言ってくれるなら……」
また捨てられるかもしれない恐怖を拭い去ることはできなくて、それでも誰かに必要とされている間だけ、少し息をするのが楽になった。それこそがこの恐怖と不安の源泉であることも知らないまま、生を渇望して叫ぶ僕の自尊心が少しだけ満たされる。
「ありがとう！　約束よ……！」
僕の手を、めぶ…三枝さんが両の手で包み込んで喜色満面の表情を見せる。

この天真爛漫さからはむしろ、結城くんや姫の性質を思わせるね……　勝手に芽吹のイメージが上書きされてしまって少し申し訳なさも感じるんだけど……芽吹の子供のころとか、ちょっと想像したりしてね……ふふ、可愛いかも。
「……調査とは言うけど、具体的には何をしに行くんだい？　あの辺りは大赦が管理しているから一般人の目の届くところには何もない筈だよ？」
見せられないようなものは、みんな金網の向こう側だ。
「その前に、一旦場所を替えない？　……さっきから蚊が……美咲は平気なの……？」
瞳から視線を落とすと三枝さんの繊細な手がぷっくりと腫れている。
「ごめん、気が付かなかった……！」
汗をかいているのは同じなはずなのに、僕はひと刺しもされていない。血液型によって刺され易さが変わるなんて噂に聞くけど本当なのかな？
「……っく、かゆいっ！」

＊

晴れ渡る空。乾燥して何処までも透く秋晴れだ。
約束の日まで暫くあるので、あれから度々図書館や公園で語り合い、ときに僕の霊場巡りに招待し、糸葉から山での身体捌きを教えてもらったりしていた。付き合うお礼にとご飯を奢られてしまうのは何とかしなければいけないとは思っているけれど、どう切り出すべきだろう……
「いつも僕に合わせてくれているけど、糸葉もこの辺りに住んでいるのかい？」
交通費や門限も気になるけど、やけに羽振りが良いし、少し心配になるくらい頻繁に誘ってくれるけど大丈夫なのかな……
「んー、車で40分ってところかしら？」
「ごめんそれは何キロあるのかな？　それと車でって、まさかタクシーで来てるのかい⁈」
金遣いが荒すぎないかい⁈　思わず大きな声を出してしまった。
「プフッ、まさかまさか！　そんなわけないじゃない！」
「そうだよね！　どこかのお嬢様でも一人で遠出なんて」
「自家用車よ」
「そうなんだ！　僕が見たことないだけで親御さんが送迎してくれて……」

「自分で運転してるわよ？」
「糸葉……自首しよう。お金もご両親に返すんだ……僕も一緒に謝るから……ね？　そうしよう？　無免許運転なんて絶対にしちゃダメだ……」
何てことだ……知らなかったとはいえ、友人に道交法違反を働かせていたなんて……！
今からでも遅くない。無事故のうちに罪を告白して悔い改めれば、きっと中立神様も許してくださる筈だ。
「……美咲……私、成人してる……」
今年で25……もっと言うと一児の母……だったりして」
糸葉は易々と僕の想像を超えてくる。常識なんてお構いなしだね。
「…………ええええっ?!」
免許証?!　ほ、本当に!?　僕より小さいのに!?　というか一児の母?!
「そりゃ私チビだし、言わなかったけど……聞かない美咲も美咲じゃない？」
「いやいやいや中学生の僕とたいして背丈が変わらない大人がいるなんて思わないよ！」
「美咲はしっかりしてるけど、まだまだね。他人を見た目で判断しちゃだめよ？」
「それはその通りだけど僕が悪いのかい!?」

「フフッ、冗談よ。私の歳を言い当てられた人なんていないもの」
そうだろうね！　まして子供までいるなんて誰も思わないよね?!
「糸葉…さんは意地が悪いよ……」
「ごめんってば、もー、赤むくれちゃって可愛いなー♪」
頬をつつくのは止めてくれ……猫にするみたいに撫でるのもっ！
立ち上がって向かいの席から、わちゃわちゃと撫でまわす糸葉の攻撃を両手で防御するけど、僕の腕力では片手を抑えるので手一杯だ。
「素晴らしきモチすべ十代肌ｗｗ　呼び捨てのままでいいのよ？ｗ」
「そんな訳にいかないよ。年長者は敬わないと」
「真面目ねえ。大人なんて言っても、結局みんな中身は子供のままなのに」
「そんなの……そりゃ糸葉さんは見た目も中身も子供のままかもしれないけど」
「あら、言ってくれるじゃない？」
……だからどうして撫でるんだ！　ちょっとしつこいぞ！
「まあまあ、美咲も満更でもない顔してるくせに」
「そっ、そんな顔っ……！」

嘘は吐けない。　たしかに僕は糸葉とのこの時間を楽しんでしまっている……けど！　されるがままのこの状況を肯定してしまうのは、さすがに羞恥が勝るじゃないか……！

「ユー、うちの子になっちゃう？　ねえ、なっちゃいなよ？　ねえねえ」

これは孤独に耐えられない僕の弱さが、人との触れ合いを求めてるだけ！　だから、こんな風になるのは僕の未練がそうさせているだけで、ぬっ、く、流されないぞ、僕は！

「遠慮するよ……！　糸葉さんは良い人だし恩人だけど、だからってそれは、そういうのは違うはずだろう？」

糸葉の表情は手の陰になっていて見えないけど、撫でる手が大人しくなった。

「ちょっと、からかっただけなのに真面目だなぁ、美咲は」

「糸葉さんは少し不真面目すぎるんじゃないかい？　言うこと成すこと軽率で…軽快で……」

「それ褒めてるよね？」

「っ……もう、いいじゃないかこの話は！　それで目的の場所の目星はついたのかい⁉」

氷が解けて薄くなったオレンジジュースをストローで吸い上げる。

言われてみると僕はずっと子ども扱いされていたし、僕への評価としてそれはきっと正

しい。あんなに目を掛けてくださった中立神様の期待さえも裏切ってしまう未熟で惨めな僕の姿は、この人にどんな風に写っているんだろう。そう思えば思うほど、咥えたプラスチックの筒が唇に吸いつく。

「……概ね、ね」

糸葉さんは落ち着き払った様子でカップに注がれた紅茶を一口含み、実年齢にしては幼すぎる容姿でここではない何処かを見つめている。

「〝すべての願いが叶う場所〟……一体誰が言いだしたのかしら。そんな場所が在ったなら壁の外のウイルスだって消えてなくなってるはずだし、『Aより金持ちになりたいB』と『Bより金持ちになりたいA』みたいに、もし二人の人間が互いに衝突する願い事をしたら、その願いはどうなると思う？　すべての願いを叶えるなんて、そんな矛盾を孕んだ無理筋……在り得ないのよ」

付き合ううちに見えてきた彼女の人物像は、親しみ易さの裏に何かを隠していて、だけどそこに後ろめたさのような不審さは感じさせず、気品のようなものとして周囲に認知させる不思議な魔力があった。思い耽る姿はミステリアスで、いつか何処かへ消えてしまいそうな、そんな空気を宿していて、僕は見えない糸で縫い付けられた人形のように糸葉

から目を離せなくなる。
「そんな在り得ない噂の真相を確かめようと数年費やす糸葉さんも、僕には信じられないよ」
「べつにその噂だけ探してたわけじゃなくて、いろんな噂を辿るうちに現れるのよ……」
「〝すべての願いが叶う場所〟が？」
「名前、年代、地域、季節、都市伝説の種別もまるでバラバラで無関係のはずなのに、ある幾つかのポイントへ収束していく……それが一時期の流行りに乗ったとかそんな程度の話じゃなくて、数十年数百年前から存在を匂わせてくるんだから仕方ないじゃない」
絶対に何もない筈の場所に、何かが絶対に在る。
火の無いところに煙は立たないというけど、そこまで言わせるほどのモノなんだろうか？　眉間にシワを寄せる糸葉の煩悶（はんもん）は尋常ではない。一体、何がこの人をここまで掻き立てるのか……
「もう5時過ぎね。日が落ち切る前に出ましょうか」
会計を済ませ、夕暮れ時の乾風（からかぜ）に冷える肌を摺る。

僕は得難い友人との別れを惜しむこの時間が、切なくも暖かで気に入っている……本人には言えないけどね。

未練だと人は言うかもしれない。でも、それでいいじゃないか。

だって未練を感じるということは、僕がその人のことを離れ難い大切な人だと感じている何よりの証拠。そんな暖かい未練なら幾らでも持てばいいと僕は思う。そう思っていれば姫に会いに行けないことの辛さだって、いつかは愛おしく思えるかもしれない。

「美咲？」

「……いや。次はもう本番前の荷支度になるのかな？」

「そうね。私はその前に一度、入山ルート確認しに行くけど」

「本当にその執念には感服するよ……僕も少しは見習うべきかもしれないね」

「フフッ、執念なんて苦しいばっかりで良いことなんてないわよ？」

もし噂が本物だった場合、そこは恐らく神域か魔界か、少なくとも大赦が持て余すほどの場所ということになる。ただの人間が踏み入っていい場所じゃない。いざというときに糸葉を守れるのは僕だけだ。

「それでも、蟻の思いも天に届くと謂うじゃないか」

「それを言うなら〝雨垂れ石を穿つ〟とかの方が格好良くない？」

「地を這う僕たちが天滴なんて恐れ多いよ。　それに蟻は凄いんだよ？　あんなに小さいのに山を崩したり城壁を崩したり天下を破ったり……」

「（竜の髭を蟻が狙うなんて諺もあるけどね……）美咲って意外と虫好き？」

……そんなことないと思うけど、気付かないうちに目で追ってしまっているかも？

「……どうかな、自分でも良く分からない。　ただ僕の部屋にハエトリグモが住み着いていたことがあってね。人に懐いたりはしないんだけど、目の前で指を垂らすとピョン。ピョン。って餌だと思って追いかけてくるんだ。　そんな姿を見てると他のことが気にならなくなるし、きっと僕にとっては水面（みなも）を眺めて精神統一するのと同じなんだろうね」

　フススと糸葉が微笑む。

「『猫みたいに可愛い』とかでいいのにどういう喩え方よ。私なら見てるだけで痒くなりそうだし、蚊にも虻にも蛭にも集られない美咲が羨ましいわ」

「毎回糸葉さんは大変そうだよね……いろんなものに好かれて……」

「モテすぎるのも考えものよね。滅ぼしたい……」

「滅ぼしちゃダメだよ」

僕たちは『冗談だ』と控えめに笑い合う。
兎に角、あのときの万分の一でも力を引き出せるように、できることは全部やってみよう。　僕はあの世界で、大切な誰かを想えば神様だって退けられることを思い知らされた。何だってできるはずだ。
「それじゃ、来週土曜にね」
「じゃあだね、糸葉」
手を振って手を放し、結局約束は守られなかった。

＊

糸葉が失踪して一週間が経とうとしている。
人が飲まず食わずで生きていられるのは精々4~5日と言われている。糸葉の事だから多少のトラブルは対策してはいると思う。　それでも先々週に入山してそのまま遭難したのだとすれば、もう一刻の猶予もないかもしれない。
「僕が、すぐに捜索願を出していれば……　いや……後悔なんてしてる場合じゃない」

当然僕は警察に相談したけど、大赦の管轄には手を出せないようだった。
「だったら……」
二次災害リスクを考えれば僕は待つべきだろう。
だけど、もし、糸葉が目的の場所に辿り着いてしまっていたら、きっと警察にも大赦にもその場所を発見することはできない。大赦がその場所を見つけられなかったからこそ単なる与太話として見過ごされてきた曰くの場所だ。僕もきっと見つけられない。
「でも……」
何もせずにはいられない。
もう待ってはいられない。
目の前には立ちはだかる剣山。
僕は今、学校も門限も無視してここに立ってる。
「これは僕のエゴだ」
『「自分は一生懸命助けようとした」と後で言い訳するためにやってること』
僕の中の悪魔の言う通り、大切な友達のために両親を騙して嘘を吐いて、良い子でいることを止めて、そうやって困難に身を投げることの快感を貪っている。僕は賤しい人間だ

から、ヒロイックな行動で辛い現実から目を覆いたいだけなんだ。
だって僕なんかが一人山を歩き回ったところで、警察や大赦の捜索力を越えられるはずないし、ただみんなに心配かけて迷惑かけるだけで結果に繋がらない。
「ジブン一人犠牲にするだけで誰かを救えるとか世界を救えるとか、世の中そんな安上がりで済むなら世話ねえよなア？」
「それで何かを救えるほど自分には価値があると思いたいだけ。キミの言う通りだよ」
もう僕は僕の醜さを否定しない。
否定したところで僕自身からは逃げられないから。
「でも、キミのことを受け入れるわけじゃない。僕はキミが嫌いだ」
山道から外れて、ほとんど踏み砕かれていない枯葉道を進む。
「あっそ。でもワレ様はいつだって美咲ちゃんの味方やで？」
気持ち悪い。
この善意を装って他を消費しようという眼差しが僕の真実だなんて信じたくない。認めたくない。絶対に嫌だ。それでも……
「……じゃあ、僕のために糸葉を見つけてきてよ」

?!「ヒヒヒ　ヒ　ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒ
ヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒ
ヒ　ヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒヒヒ　ヒ
ヒヒヒヒヒ　ヒヒ！ヒ　ヒ　ヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒ　ヒ　ヒヒヒヒヒ　ヒ
ヒ！ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒ　ヒヒ　ヒヒヒ　ヒ
ヒヒ　ヒ　ヒヒヒヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ　ヒヒヒ
ヒヒ！！　ヒヒヒヒヒキャキャキャキャキャキャキャキャキャキ
ャア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛アイイイイイイイイ
イヨオオオオオオオ！！！！」

狂気的な勧笑に驚いで振り向くと、２本の角を生やした老婆がゴワゴワの白髪を振り乱しながら森の中を縦横無尽に駆けて何処かへ消えてしまった。
「え……なに……え？」
血の気が引いて焦点が揺れる。
僕はアレが醜い僕自身の心の姿だと思っていた。
「だから受け止めることで乗り越えようと……でも、もしかして……」

前提から間違っていた？

妄想じゃなかった？　悪魔が自らを僕の妄想だと信じ込ませて自己否定するように仕向けていた？　何のために？　どうして本性を現した？　目的が達成されたから？　最後の会話は……『糸葉を見つけてほしい』。……悪魔……お願い……　願いが叶う場所…………
悪魔に願った?!　悪魔の存在を望んだ?!
「！　まてっ!?」
いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！　やめてくれ！　何を油断してたんだ、僕は！　こ

こには何かあるって分かってたのに！　っ！……お願いします中立神様！神樹様！　虫が良いことも分かっています……！　でも！どうか糸葉を助けてください……！　あのバケモノから守ってください……っ、お願いします！　お願いします！

「クソッ……！　あ゙あ゙あ゙あ゙ヅ……どうして僕は……!!」

糸葉を助けたい本心とは無関係に、内臓を抉るような脇腹の痛みに足が止まる。

「なんでっ、こんな　なさけない゙っ！僕は！」

激痛に魘（うな）されながら意地だけで駆けずり回る。

涙で視界は滲み、酸欠で頭は殴られたように痛み、脚は荒縄で締め上げられるようだ。

僕の足で捕まえられるわけがない。

アレに見つかるより早く、糸葉を発見するのだって無理だ。

脚が重い……　結局僕は「無駄な努力をしているだけ……」

足を止めてしまった。

僕のせいで友達が死にかけてるかもしれないのに、動けない……

――僕が自己嫌悪で心を腐していると、枝の折れる音と共に彼女は現れた。
再会を喜ぶことが罪となる絶好のタイミングで彼女が現れた……
「うぉおおおおおお！・死なぬ死なぬ死なぬは死なぬときぃぃぃぃぃぃ！！！」
斜面を駆け落ちるように落ち葉を巻き上げて、待ち焦がれた彼女は降り立つ。
「ズッサーーーっ着地！☆　こんなとこで第18町人発見っ！　貴女のお名前は⁉　あっ姫ちゃんは姫チャンネルの姫ちゃん言いまっス！　お姉さんは、どうしてこんな……んん？？」
「姫…「もしかして姫ちゃんのフォロりんな方っすか⁈　いつも見てくれて、ありがチョリッス！今日もバリバリ撮るんでよろりんっとそんなことより、どうして泣いてるん？」
姫の807面相にはいつも圧倒されてしまうね……
「ううん、何でもない。独りがちょっと、っ怖かった、だけ、っ」
袖で涙を拭って笑顔を向ける。
もう姫にとって僕は他人なんだ。巻き込んじゃいけない。

「じゃあ、姫ちゃんが下山まで付き合えば怖くないね！」
「ぇ「分かり太郎丸。山ん中薄暗いし、寒いし、変な鳴き声聞こえるし、おばーちゃんの笑い声みたいのが山を揺らしたときは流石の姫ちゃんも涙ちょちょぎれるとこだった……飴ちゃん食べる？」
ひょっとして姫……「怖いの？」
「べべっつつつに怖くなんかかかあるし？？？？」
どうしよう……　こんなこと思っちゃダメなのに……　こんなときなのに…姫に会えてうれしい僕が居る……
「一緒に居てあげたいけど、ごめんね……　人探しの途中なんだ」
「おけまる！一緒に行くよ！　一人より二人、二人より三人、三人より千人だよね⁉　……ね⁉」
「……最後のは良くわからないけど、分かったよ。　でも時間が無いから、走るよ…！」
「了解ッ！」
姫に支えられて僕は再び一歩を踏み出す。
キミと一緒なら、奈落の底も桃源郷に変わるだろう。

姫の傍にいると、どうしても頬が緩む……そんな場合じゃないのに困ってしまうな……
だからこそ、未来ある大切なキミを道連れにはしたくなかった。
これも言い訳かな……僕にはキミを幸せにする自信が無かった。
キミは自分自身の力で幸せになれる人だから、そこに無力な僕は必要ない。僕の不幸に巻き込んでキミの未来を穢せない。こう生きることしかできない僕とは違う。キミは僕とは違う。
「あ！　名前教えてよ！　私の名前は法花堂姫（ほっけどうひめ）！　気安く下の名前で呼んで、ってもう呼んでたっけ?!　いつもご視聴あざっす!!」
ほら……だって、姫は僕のことを忘れても幸せそうじゃないか。
僕があの世界のことを忘れることができていたとしても、姫みたいに笑えない。
「僕の名前は天馬美咲！　好きに呼んでくれていいよっ！　……最近はあまり見れてなくて、ごめんね？」
「なぬですとっ?!　見ろよ！見てよぉ！　スパチャもいっぱいしてよぉ！　なんちて☆」
人の道を外れるのは僕だけでいい。
……中立神様。見ておられますか？　僕は今でもあなたと共に往きたい。

前とは別の理由。
今度は姫……大切な人達の幸せを守り続けるために、僕はあなたの力を望みます。
他力本願でも、風に折れた葦のように弱い僕には、あなたに通じるこの巫力が一つある
だけだから。祈ります……

――

「たしか、こっちに……」
まだ若く、僕たちの腕と変わらない太さの木を頼りに45°はある崖を水平移動する。
「姫ちゃんてば霊感つよつよ少女だから、都市伝説検証企画とかもやってんの♪　今日は
その撮影っ、で」
「一人は危ないよ、姫？」
「分かっちゃいるけど、やめられない。　人のサガってやつ？」
「また、適当なこと……糸葉さんも同じか」
「探してるって人？」
「そう。三枝糸葉（さえぐさいとは）さん。命の恩人なんだ」
「へー。どんな人？」

「そうだね……髪は胸の下あたりまである黒髪のハーフアップ。大きくてシュッとした目元は優しくて、いつもどこか遠くを見てるんだ」
その不思議な眼差しで見つめられると、僕は僕の正体も心中もすべて丸裸にされてしまうんじゃないかという不安と、この人なら僕を解ってくれるんじゃないかという期待で動けなくなる。
「言葉や雰囲気は柔和で、でも少しミステリアスな魅力もあるかな。
あと糸葉さんは僕より小柄なのに力持ちで、子供みたいなのに成人済みで、素行は不真面目なお茶目な人で、仲良くなるとちょっと馴れ馴れしさが目について、一度決めたら何処までも追い詰めて突き詰める。　そんな人だよ」
「なるほどなるほど……姫ちゃんみたいな人なんすね」
「ふふ、それはどうだろう？」
「♪　やっとわｒ」「姫！」
何気に見上げた先には、姫の頭上でギャギャギャギャと不気味に笑う老婆がいて、今にも突き落とそうと手をかけるところだった。「姫逃げっ」僕たちは崖から滑り落ちないように気を払いはしても、頭上から襲い掛かる災厄なんて全く頭に無かった。　死。　何の脈絡も

無くそれは唐突に目の前に現れて僕たちの未来を奪う。

「「姫ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!／きゃあああああああ!!!!!!!!」」

＊＊＊

……空が見えない。

……姫を助けようとして一緒に落ちて……

あれ……崖から落ちたのって今日だっけ……一昨日だっけ……

姫……どこ？

僕たちは結局……

ごめんね姫……僕のせいだ。

糸葉さん……迎えに行けなくてごめん……

中立神様…………中立神様……？　ああ…………見ていてくださったのですね……

ごめんなさい……僕はあなたの愛に報いることができませんでした………

僕は愚かで、せっかく残していただいた記憶も無駄にして……なんと申し開きすればよ

いか分かりません……『　　　　　　』え……？

＊＊＊まだ終わりじゃない＊＊＊

僕と僕のいる場所から響いて〝意思と意味〟が頭に直接吸い込まれる。

「「美咲！／みさきち！」」

「う……」

「よかった、意識が戻った……！」

僕はまだ死んでいなかったみたいだ……

「二人とも……無事だったんだ」

「『無事だったんだ』じゃないって、みさきち……　もうまじ心配したってー……」

ここは何処だろう……洞窟？　……天井の高い防空壕のようにも見える。

「心配させたね……僕は大丈夫。すまないけど、気を失っている間に何があったか聞かせてくれるかい？」

「特に何も無いけど、私があの壺触ったら突然みさきちぶっ倒れて、１０分くらい？『電

波届かないし、どうしよ』ってオロオロしてたら、みさきちが自分で目を覚ましたんだよ」

「うん？　ごめん、僕たちが崖から落ちた後どうなったのかな？　その口ぶりだと僕は自分の足でここまで歩いてきたように聞こえるけど……」

崖下に洞窟があり、そこに偶然居合わせた糸葉と協力して運び込んだということではないのかと、悪い予感が美咲の脳裏をよぎる。

「崖？　ぶっ倒れたときに頭打ったのかな……　本当に平気？　どこも痛くない、みさきち？」

「姫は僕と一緒に落ちただろ……？　覚えていないのかい……？」

「記憶が混乱してるみたいね……　美咲。今日、宿を出てからのことを覚えてるだけ全部話して」

「宿……？　何を言ってるんだい……？　僕は行方不明になった糸葉を探しに一人で……」

「みさきち……？」

……二人の話すことが僕の記憶と食い違ってる……　嘘を言ってるようにも見えない……

…！　なら僕がおかしいのか……?!　それとも僕たちの記憶が何かに書き換えられてる?!

違う！　少なくとも、いや、二人の記憶が正しいとして、だったら僕たちは何処でいつ出会ったんだ！　僕の糸葉との出会いの記憶が偽物だとして、そんなものを捏造する意味が分からない！　いったい何が起きて⁉　……そうだ、姫はさっき『壺に触れたら僕が倒れた』と言っていた。落ち着いて現状を把握しろ……

おもむろに立ち上がり洞窟内に視線を這わせると、それはあっさりと見付かる。

「……骨壺？」

それは奇妙にして異様で威容。

それは奥行きが無く影が落ちることがなかった。曇りひとつない快晴が壺の形にくり抜かれているようなそんな錯覚を覚える。まるで洞窟内に開いた風穴から青空が差しているようだった。

「美咲……？　もう少し休んでいた方が……」

〝人頭大(じんとうだい)のそれ〟からは否応なく骨壺だという確信を植え付けられる。それは手を伸ばしても距離も大きささも計り知れない青天井のように比類するものが無く、凹面鏡に投影された虚像のように現実から浮いた不可解さを放つ。

太陽を直視してしまったときの様に猛毒の空色が網膜に焼き付いて離れない。
陶器でもガラスでも金属でも在り得ない。物体でさえないいんだろう。
そこに在って、ここには無い。
この世の理から外れた異物という表現で漸く正鵠を射る。
「姫……糸葉さん……ここは何処なのかな？」
おおよその見当はついていた。そしてその予感は当たっていた。

「「〝すべての願いが叶う場所〟」」……」

ここにきて何かが起こるとすれば他にない。
「じゃあ、姫……　『着物を着ていて、刃物を持った二本角の白髪の怖いお婆さん』か、緑色の巨大な……芋虫みたいな怪物を見なかったかい？」
「……白髪の女の子ならそこにいるけど……」
空の向こう側に広がる闇に目を凝らすと、確かに人影があった。
僕は極力刺激しないように会話を試みる。

「……キミが僕たちをここに連れ込んだのかい？」

「……（ちわ……）」

「？　なに？」

「……（願いは？）」

「ごめん、聞こえない……もう少し声を張ってくれないかな？　キミは何者？」

……………………返事がない。

「覚えてないみさきちに説明すると、その子ずっとその調子で生気が無いんだよね……」

「ホント辛気臭えよなぁ」

「明らかにここのこと解ってる風だから話を聞きたいんだけどね……」

「……願いは……？」

「あ、話してくれた！」「……」

また黙ってしまった……　願いを尋ねてくるということは、やっぱりここに関係する何か？

「姫ちゃんの願いは—「待って姫、得体の知れないものに迂闊なことを言っちゃ駄目だ。……糸葉さん?!」

糸葉さんが壺を手に——————

「このままでは埒が明かないのも事実。私の願いは」「止すんだ糸葉さん！駄目だ！」

絶対良くないことが起こるのに糸葉さんを止められない……！このままじゃ……！「手伝ったろか？」こうなったら無理矢理口を塞ぐ！？「なあ？　美咲ちゃん」

それはいつも傍にいて獲物が躓くのを待っている。異様な空間に異常な存在。「みさきち!?」わけの分からないこの世界に確かなものなんて初めから無いのかもしれない。「お前……」神も悪魔も願いを叶えるところは同じだった。「誰が悪魔じゃい、まあ最近は魔王マーラ様で通っとるが」初めからそこに居たとでもいう様に、僕の後ろで熊より大きな緑色の肉柱が鎌首を擡（もた）げている。

「お釈迦さまの悟りを妨害したというあの…「『釈迦を悟りに導いたあの』だぜ、美咲ちゃん」「みさきちの知り合い……?」「僕に憑りついていた悪魔だよ……」「美咲ちゃんとは相思相愛の関係で「ふざけるな」素直じゃないなあ」

どうしてそんなものが僕に……

でも、これまでのことに少し合点がいった。やっぱり僕はこいつに騙されていた。こいつは僕と何の関係もない悪魔だった。お陰で糸葉さんの願い事も有耶無耶になったけど……そういえば糸葉さんは？

「我は他者の姿も喜びも苦しみも我がものとする他化自在天(たけじざいてん)よ。美咲ちゃんが我の手練手管に悦んでいたことも勿論知っておる。そしてここは化楽天(けらくてん)。望む世界を創造し続けるここは正しく〝すべての願いを叶える場所〟だ。おめでとう。キミたちは死と願いの果てに辿り着いた」

「めちゃめちゃ胡散くさい……」

「お姫ちゃんはこの姿でも話しかけるか。いいね。　望むなら想像し創造するがいい。求めよさらば与えん」

　悪魔の姿がグネグネと縮みながら、うねり、角の生えた白い少女へと変わる。

「因みにさっきのは常世神の姿よ。　改めて願うがいい三枝糸葉。キミにはどうしても叶えたい願いがあるのだろう？」

　糸葉さんがこっちを……こいつが見えてるのか⁉

「……本当に叶うの？」

「待っ「他人の希望を奪う権利なんて美咲ちゃんにあるのかな？　往生際が悪いぞ。　そもそも美咲ちゃんを蘇らせるために創り直されたのがこの世界。願いを否定して死ぬか？」
「どういう……いや、お前の言葉なんかにもう惑わされない！」
「やれやれ天邪鬼だねえ、美咲ちゃんは。　我は『他者の姿も喜びも苦しみも我がものとする他化自在天』それ即ち、他者の欲、執着のすべてを知るものということ。
美咲ちゃんは己の正しさが報われない不条理な世界に絶望し、何者も抗えない強大な存在を求めていた。
そして望んだ強大な理解者を得たかと思えば、それはあっけなく失い、希望を見出せない現実に立ち戻った美咲ちゃんは、否定され続けた故に己の中の正しさに固執し、その自らでは捨てられない執着故に、理不尽に正しさ（くるしみ）を簒奪してくれる強大な背徳を求め、その化身である我に組み伏せられることから悦楽を得た。　私はその願いを汲んだに過ぎぬ。事実、抱かれている間は、他人の目も孤独な自分も忘れられただろう？」
気持ち悪い……
悪魔の言う通り、穢れた醜い自分への嫌悪感に支配されて他のことなんて如何でもよくなった。何もかも上手くいかなくても全てこいつのせいにできる。僕がどんなに情けない

愚図でもこいつが居る限りすべてが免罪される。妄想の中で辱めを受けるだけでそれが手に入ってしまう。神に見放された僕が悪魔に縋ってもそれは仕方ないじゃないか。　そう思う自分が『魔が差した』と悪事に手を染める連中と重なって僕は憎悪を募らせる。

「美咲……？」

「みさきち……？」

何も言い返せない自分に絶望して、羞恥と嫌悪で今直ぐ消えてしまいたかった。

だから

「みさきち……どこ？」

僕はここに居るのに、二人には視えなくなってしまったみたいだ。

「みさきちに何をした！　どこにやった！」

姫が悪魔の胸ぐらを掴んで詰問してる。　僕はもう、このままでいい気がしているよ…

…姫。

「すべての願いが叶うなら、取り戻すことだって……」

『矛盾する二つの願いが同時に叶うことはない』って糸葉が言ったんじゃないか。きっとおかしなことになるから止めておきなよ……
悪魔は今も僕を見つけている。
願いを叶えるのが本当なら……つまり僕たちの記憶が食い違うのは。
『前の世界の美咲ちゃんが引き継がれたから、この世界で生きた経験は無く、記憶も無いってことやな』
お前が何かしたんじゃないのか？
『他者の心と姿を手にできるだけで、死人を甦らせたり記憶を書き換えたりはできんよ』
そうか……　じゃあ、僕はこのまま人々を守る全能神に成ればいいんだね。
すべてはこの瞬間のために有ったんだ。
糸葉。キミが失踪して知ってしまったことがある。キミは事故で亡くした子供と恋人を取り戻したかったんだよね……大丈夫、僕がキミの悲しみを奪ってあげる。二人が死んだ世界から、二人が死ななかった世界に作り直す。　そうだ。天の神だって無かったことにしてあげよう！
「みさきち！」

姫……キミが僕の死を否定してくれたから僕が在るんだよね？　普通に世界をやり直すと記憶を引き継げないことも、キミのお陰で知れた。きっと成し遂げてみせる！　なんて……………………これじゃ、あのときと一緒だ。

「……願いは？」

「……キミはどうしてここに居るんだい？　僕は、キミのことが知りあひ？」

視界が暗く沈み、舌がこわばる。

＊＊＊　始まりも　終わりも　＊＊＊

宇宙が万死に値する膨大な時間の記憶と、その意識が僕の脳を掻きまわす。

「きもひ、ぁるぃ」

全身の血管が弾けて、細胞がぐずぐずに壊れるような耐え難い痛みと痒み。

「あだ…！　ぃあ…！」

捩じ切れる手足。

熱気に焼け爛れる肺と喉。裂けて泡立つ眼球。——

『報復を恐れた神々は、私達に不滅の呪いをかけて宇宙が滅ぶまで異次元へ幽閉することにした』『地の底で氷漬けにされた私から呪いが漏れ出して、焦ったのだろう。それから私たちは世界から世界へと押し付けられながら、永遠よりも長い時を過ごすことになる』『宇宙の始まりも終わりも見てきた』『世界の始めに神は無く、果てのない虚無だけがここに在った』『完全で絶対で純粋で秩序ある混沌』『力場の膜で構成されるこの物質宇宙の外で今も時空を恐ろしげに軋ませている』『宇宙から生まれた神は宇宙と共に滅び。私たちも真空崩壊と共に外宇宙に還元されるはずだった』『運命も概念体も無から全てが生じ無に帰る』『均質な無へと均される』『ようこそ外宇宙へ』『無とはゼロであり［0＝±1］のことである』『無とは空虚であり虚空である』『無限大の無限小である』『実体なく実態あるもの。外宇宙であり、ここも以前は負の圧力の領域がただ無限に広がっているだけだった』『私たちは不幸にも、神が私の呪いを拒絶するために、つまり宇宙に干渉できず干渉されない次元の狭間にいた』『すべてが消えて私だけが残った』『残された私にすべての運命、縁が収束し、集約される』『そして絶対真空の何もかもを塵以下に引き千切る応力が時の生まれるより先に自らを引き裂き、無（0）を粒子（プラス1）と反粒子（マイナス1）に選り分け、0次元空間が7次元以上へと拡大し、裏返り、相転移を起こしてこの宇宙が在る』『無の中では時間が存在し得ず、それは気

絶した我々が、誕生と共に意識を目覚めさせ存在を開始する以前の我々が、我々の主観に於いて時間の一切を認知しないように、覚醒した事の終わりから記憶を遡り刹那よりも早く宇宙は爆誕する。何度でも』『私は開闢（かいびゃく）前に居た何か』『宇宙の始まりと無関係にいた世界の残滓』『神は世界であり宇宙であり因果関係に意味を付与された存在である』『君たちは肉であり個人であり世界と不可分であり膨大な因果の中の一因子である』『人は死後、幽冥神の元で神となる』『因果の奔流である神も、因子の1として僅かながらも世界に干渉する力（影響力）を持つ君たちも、及ぼす規模が異なるだけでその本質に大した差は無い』『宇宙の縁起の象徴が神ならば、この宇宙の外ですべての縁起の終着点となった私は外の神ということになるのだろう』人類の知見に於いても、事象の地平に薄く広がる真空中ではプラスとマイナスの光子が対生成されているとされ、しかしここが物質宇宙内である限り完全な真空、専門用語で表すところの絶対真空を用いた実験が凡そ不可能である限り、デミブラックホールによる不完全な証明に帰す言葉によらず表現することを許されない。知らないはずの知識と感情が濁流の様に流れ込んで僕は理解する。

自らの始まりと共に世界は目覚める――

「キミは……　いや、キミたちは……」
地の底に眠る災厄の象徴であり、この宇宙の基準となった外なる神。
他化自在天も、化楽天も、山で見た魔物も、被鬼も、原因も結果も、すべてがこの世界そのものである君だ。……僕自身さえも。
「キミが取り除かれて空いた世界の虚を埋めるようにして生まれたのが、僕……」
キミは富も名声も、あの子の心も思うがまま。
できないことは何もない。
「でも、そんなの……自分の思うことを語るだけの他人なんて、妄想と何も変わらないじゃないか……園子君との別れも、あんなのでキミは本当に良かったのかい……？　こんな結末で満足しちゃダメだろ……」
肩を揺すっても反応は無い。
きっとこの問答も何百何千回と繰り返したことなんだろう。
すべての関心を失って、瞳を虚ろに曇らせたまま意味の無い譫言(うわごと)を吐き出している。
「……願いは？」
……こんなものが神だっていうのか……？　こんな、心神喪失者の見る夢が世界の真実

……？
「……願いは？」
「教えてほしい……　世界が夢幻でしかなく、そこで生きる僕たちも君の妄想でしかないのなら、一体僕たちは何のために生きてるんだい……？　どうして君のために僕たちがこんなに苦しめられなきゃいけないんだ……」
昏い瞳に僕の姿が映る。
彼女、もしくは彼の口角が僅かに持ち上がる。
化楽天の皮を被って何かがそこに蠢いている。
『私が夢に描かずとも虚数の世界にすべてが生まれ滅び続ける。ならば世界線を変えず、時を戻さず、並行世界にも移らず、全ての世界のキミたちをこの世界で引き継ぎ、この世界で幸福へ収束させる』
頭の中に直接打ち込まれるような声ならざる声は神託に似ているのに、何かが明確に異なっていた。
「僕たちはそのための犠牲ってこと……？」
『否。キミたちが幾億度死のうと私が回収し次の世界へ引き継ぐことで、再生後の君たち

の同一性を確保している。それはすべての破滅と絶望を過程に貶め、無為に変じさせることである』
「どうやって」
『個体とは即ち縁の蓄積されたもの。その収束点である私が不滅である限り、キミたちが途絶えることはなく、真に死ぬこともない』
「それも意識の消滅で断たれる。生まれ変わりはこの僕自身じゃない」
『否。私は世界であり僕はキミ自身でもある。故に生まれ変わりではなく、転生でもなく、これは再生なんだ』
「僕の意識がキミに取り込まれて消えるだけじゃないか」
『否。この僕は鏡に映る自分の陰だと考えると良い。飽くまでキミが存在の主体だよ。現にキミ自身再生されたばかりじゃないか。前の世界の自分は自分じゃないと感じてる？キミはキミだろう？』
……何も感じない。記憶の食い違いが表に出るまで気付きもしなかったくらいだ。でもそれは僕から見てそうなだけで、前の世界の僕からしたら僕は僕じゃないかもしれない……でも僕にはそれを認識できない、確かめることができない、確証が何もない、なのに

僕はここで生まれた記憶が無い、じゃあ僕は一体、僕は何なんだ……？　まて……何故僕だけがあの異界の出来事を覚えていられた……？　僕は……僕は……　っ、考えるな！　気がどうにかなってしまう……！

「大体こんなことしてキミに一体何の得があるんだ……！」

『……僕はもう知ってるだろう？　結果的にこうなっているだけで、私が私で在り続けているだけなんだ。　私が僕たちを愛していても、僕たちが私の一部になってしまったから私に得られるものなんて何もない。　何をしても、しなくても』

「……キミはこの宇宙の因縁の全てを自由にできる絶対者だろう？　何も得られないなんてこと……」

『キミも「妄想と変わらない」と言っていたろう？　その通り。全能と言えば聞こえはいいけれど、世界そのものだから可能というだけなんだ。　そして世界そのものだから、何をしたところで一人遊びの域を出ない……自分の指を千切って人形に見立てても人形を得たことにはならない』

それなら神様なんて辞めてしまえば……

『そうも行かないさ……死者を死から救うには因果をすり替えられるこれしかない。私が

世界で、世界の一部である僕たちも私でしかなく、並行世界の僕たちは僕たち自身とは別の存在であり、私の望むものは私の内にしかなく、私の内にある限り寄り添えず、そして不可分。　私が私と共に在ろうとも、私が私の側らに立つことかなわず。
　僕たちに逢うために世界を手放せば全能も失われ、全能を失えば結局それは叶わない。僕たちにとって神様以上の絶対者でも、私にとっての私は呪われた私のまま。　私の願いは不運に挫かれる』
「……だったら僕が君を引き継げば」
『……許すわけないだろう？』
「……キミは僕たちを大切に想ってくれている。でもそれは、彼女たちにとってのキミもそうだったはずだろう？　キミ一人が自分で自分を騙して、偽って、満足した気になって、みんな置き去りにして、そんなのは欺瞞だ」
『だからって、入れ替わりにキミが姫たちを置き去りにするんじゃ仕方がないよ。　気に病まなくていい。私に呪いを掛けたのも結局私自身だったんだから』
「本当は嫌なんだろう？　もう止めよう、こんなこと……」
『ありがとう。でもいいんだよ、これで』

……平行線だ。会話に応じてくれるだけで結論が先にあるから対話に至らない。　あのときの僕と同じ……

『世界を絶対者である私の意識から自由にするために私は私の意識を手放した。だから「嫌だ」なんて感情も私には無いんだよ』

　悪魔に唆されたと言い訳するのももう止めよう。

　僕は現実の辛さから目を背けるために自慰行為に逃げた。それが真実。

　僕が君自身なら、キミも分かってる筈なんだ。　こんなんじゃ駄目だって。

「……僕たちを幸福にとキミは言うけど、僕たちは君自身なんだろう？　なら、キミは自分の淋しさを慰める行為に耽っているのと何も変わらない。それでキミは幸せだと言うのかい？」

『それが世界の全てで、それが私なんだから私は私を受け入れるよ』

「もういいじゃないか。悟ったようなことを言って、自分を苦しめるだけの正しさ（妄執）なんて捨ててしまって」

　仏教は苦しみから離れるための教えなんだろう？

　これはキミの知識から得たことなんだから、キミがそれを知らないはずはない。

「『僕がキミと対等な存在になる』そうすればもうキミは独りじゃない」
　これも、キミがかつて高嶋君を救うために約束していたことだ。　キミがキミを受け入れる限りこれを否定することはできないし、否定するならキミはキミの原則から解放される。
「僕たちは君の無意識。無意識故にキミの意識とは完全な同一じゃない」
　運命である君一人の意識が僕たちの自由を奪ってしまうからキミは眠りについた。それももう知ってる。天の神が怒った原因の原因がキミにあることも。だけど。
「だから僕は僕だ。君の中のキミ以外の君だ。＝（イコール）ではなく≒（ニアリー）だから」
『関係ない。キミにそんなことをされる義理は無いし、もう一度言うが、そのために御前はあの二人を置き去りにするのか？　自己矛盾だろうよ』
「キミがそれを言うのか？」
『私にはそうする理由がある』
「頑固者……」
『元から方法が無いのだから頑固もクソも無い。　すべては過ぎたことで、遥か昔に終わった噺。時は戻らず、ただ未来に過去をソックリ差し直せるだけで、私が創り直した過去

に私は存在せず、必然彼女たちにとっても存在しない誰か以上に成り得ない』
「それでも二人三脚なら、自分の世界への強制力を互いに牽制できるから現状よりはマシなはずだろ！」
『そもそも何故拘る？　僕は私と入れ替わりなんだから面識も無いし、思い入れるものも無いだろう？　私の記憶に引っ張られ過ぎてやしないかい？』
「キミと同じだよ。僕もキミを救うことで救われようとしてる不純な人間だから、今キミを見捨ててしまえば僕は僕の幸福を望むことができなくなる」
『なるほど、それは合理的だね。　でもその呪いは僕が奪ってあげるから、大丈夫だよ』
「キミこそ、どうして独りになろうとするんだ……」
『独りに生まれて、独りでに生きて、孤独に死ぬ。
　勇者部員のキミは幸せそうだったじゃないか……
　何も成せず、愛したものには忘れられ、骸を弔うものも無く、何も得ず、失い続け、時間だけが無限にあり、不幸をまき散らしながら妄想の中で死に絶える。　私のようなクズには相応しい死に様だろう？』

言葉が出なかった。
きっと何を言っても無駄。
不毛の地平が広がるばかりで精神が摩耗する……もう放っておけばいい……

諦めと共に僕の絶望はやってくる。

「ならば我等が引き継ごうぞ、私」
……お前はいつも僕の後ろにいるな。
「世界なぞに意識があるからダメなのだ。隠居せよ御老体」
「お前どうしてここに…………うわ」
「汝は我。我は汝。　主が眠りについた後も、世界にばら撒き続けた無意識が我々だ」
振り返れば同じ姿の無数の白い少女が、そこかしこに蠢いて……　うわぁ…………
「再度告げる。　荷を下ろし隠居せよ、御老体」
……前の世界の記憶も持っていたし、色々とおかしいぞこいつ……
「何もおかしくはないさ。　我は汝。美咲ちゃんが知っていることを我が知らぬはず無か

ろう」
　やりにくい……
『……そうだな』
「ええ……いいの？」
『他化自在天は全ての意識・無意識と繋がっている。それは私の意識がすべての意識を支配してしまうのとは逆で、すべての意識が他化自在天に集約されて世界の進退が個々に少しずつ委ねられることになる。それは集合無意識の顕現と相違ない』
　僕はこいつが創造主になるの嫌すぎるんだけど……
『呪いや誓約も含んだ、これまでに私が生んだすべての私達を統合する以上、自由な存在にはならない』
「……それで良いのかい？」
「無意識が意思に逆らうこともあろうが、基本的に主と一心同体。そして私は他者の喜びも苦しみも我がものとする他化自在天。キミたちの喜びは私たちの喜びになる」
　一見、慈悲深い様な事を言ってるけど……
『……僕にとっては恐ろしい悪魔だったけど、彼らは業の存在であって、善悪の外側に居

るんだよ……〝大欲無欲に似たり、煩悩即菩提〟ということだね……』

……これで良いのかな。

「……僕は何か腑に落ちないけど、キミはこの後どうする気だい？」

『私は消える』

「死ぬってこと？　……こんな状態の僕を残したまま一人で逝ってしまうのかい？」

『……分かった』

「ごめんね？　でも、約束はできないけど、きっと後悔させないから……」

「はっは！　では願え、己（おの）が神たる己（おのれ）自身に！」…………

願いを打ち消すには、願ったもの自身が願い直さなければならない。

幸福とは何か。

即ち、選択肢を知ることが可能で、選択することが可能で、実現可能性を持っていること。要素に纏めれば『把握可能感、処理可能感、有意味感の3つを保持していること』となる。

課題を前にしたとき対処可能なことを知らぬは不幸であり、知るだけで選択の余地が無ければより不幸であり、理不尽に抗えぬは不幸である。

私は一度は理不尽を退けたが、蓋を開けてみればそこは袋小路にあり、過去の不幸を滅ぼす代わりに未来を失った。私を呪った神の正体は私自身であり、世界がこんな有様なのも私が神だからだと思えば納得してしまう。　私が何故私を生んだのかは今も分からないが、きっと特に意味なんて無い。きっと私にとって私は私の無意識のうちの一体でしかなかったのだろう。

それでも彼女たちが幸せになってくれるなら私には十分だった。
生きていることが幸福なのではない。　富むことが幸福なのではない。
慕われていることが幸福なのではない。　苦しまないことが幸福なのではない。
縛られないことが幸福なのではない。　老いず病まぬが幸福なのではない。
私は遂行し達成した。シアンの壺は完成し、私は満足した。
私は十分救われている。

＊＊＊

だから次の世界では　幸ふ花たちを

＊＊＊

みるな